

茶会記 Riverside Jazz Story 第11回 2011-8-6

～A Cannonball Adderley Presentation Series Vol.3～



『Paul Serrano / Blues Holiday』 (RLP-359)

Riverside Label 裏街道 瀧口讓司

『リヴァーサイド・ジャズ物語』の第11回。瀧口が担当します「リヴァーサイド・レーベル裏街道」は、タレントスカウト、プロデューサーとしてのキャノンボール・アダレイの実績を刻んだ、「A Cannonball Adderley Presentation」のシリーズの最終回として、レコーディング・エンジニア、プロデューサーに転身し、シカゴにレーベル名を冠した「Riverside Studio」を設立、ジャズのみならずブルース、R&Bなどの音楽制作に関わったトランペッターの Paul Serrano (ポール・セラーノ) の唯一のリーダー作品『Blues Holiday』から聴いてみよう。

M1. Little Niles 4:02 Paul Serrano / Blues Holiday B-1
M2. Mr. Lucky 5:52 Paul Serrano / Blues Holiday B-2

Paul Serrano (tp) Bunky Green (as) Jodie Christian (p) Don Garrett (b) Pete La Roca (ds) Rec. at Universal Recording Studio, Chicago; 1960-11-8

今回、キャノンボールのプロデューサーとしての実績を彼が自ら描いた書いた自伝から辿ってみると意外に面白い姿が浮かんできた。ソニー・ロリンズの後釜としてマイ

ルス・デイヴィス・クインテットの一員となったキャンノンポールは、そこで2年間を過ごした。本人が言うようにコルトレーンから多大な影響を受けながらも、マイルスの許を1959年9月に辞したキャンノンポールは、「ソウル・ジャズ」に身を投じる。そして、絶大な人気を得た彼が多くのセッションや地方での公演中に見初めたミュージシャンをオリン・キープニュースやビル・グラウアーに紹介した。

そうした中でシリーズ第9弾として白羽の矢を立てられたのが、ポール・セラノだった。Wave Jazz Classic 発売時に書いたライナーに記した通り、その当時シカゴで活躍する Eddie Higgins の Vee Jay への参加がジャズファンへの紹介状となったポールは、シカゴ市民交響楽団、ウディー・ハーマン・ビッグバンド、トニー・パスター・オーケストラなどの一員として活躍したのち、自己のクインテットを率いてシカゴで活躍していたポールを1960年の工作中にシカゴのライヴハウスで聴いたキャンノンポールは、直ちに録音を申し出た。

メンバーは通好みの27歳のアルト、バンキー・グリーンと、その後、長くシカゴの地元ミュージシャンとして活躍を続けるジョディー・クリスチャン (p)、ドン・ギャレット(b)のほか、レギュラー・ドラマーが手配できなかったため、ピート・ラロックがニューヨークから呼び寄せられた。その後のポールの演奏を聴くまでもなく、ソリストとしての実力は必ずしも超一流ではなかったが、ここでは時代の潮流を感じさせる演奏を聴かせ、キャンノンポールの期待に応えている。



M3. It Could Happen To You 6:48 Bunky Green / Another Place (Label Bleu)
Bunky Green (as) Jason Moran (p) Lonnie Plaxico (b) Nasheet Wats (ds)
Rec. System Two Studio ,Brooklyn . 2004-11-27/28 : Produced by Steve Coleman



ポールは、その後、『James Moody / Another Bag』(Argo)の作品などには参加するが、やがて、プロデューサー、エンジニアに転身し、売れっ子となり、シカゴ地元の Nessa、Delmark といったジャズレーベルのレコーディング・エンジニアとしても名前を残し、自己の「Riverside Studio」を設立している。

M4. Close To You 3:54 Richard Evans / Dealing With Hard Times (Atlantic)
R&Bなどでのセッションへの参加の例として、ちょっと、聞いてみよう。1972年発売の時代の雰囲気伝わる。

また、1996年に録音され、その後、実力以上の人気を博した Eric Alexander が参加した Cecil Payne / Scotch And Silk (Delmark)は、Riverside Studio でポールがエンジニアを務め録音されている。名手マーカス・ベルグレイヴの参加が注目だったこの作品もリヴァーサイド・レコードのコンセプトの延長線上にある作品といえるだろう。

M5. Lady Nia 8:18 Cecil Payne / Scotch & Milk (Delmark)
Cecil Payne (bs) Marcus Belgrave (tp) Lin Halliday (ts) Eric Alexander (ts) Harold Mabern (p) John Ore(b) Joe Farnsworth (ds) Rec. at Riverside Studio, Chicago.
1996-9-2/3 by Paul Serrano

＜実現しなかった幻の A Cannonball Presentation 作品＞

キャノンボールの自伝には、リヴァーサイド・レーベルの解散によって実現しなかったミュージシャンとして、Alvin Batiste (cl)の名前が挙がり、詳しく述べられている。アルヴィン・バティスタもバンキー・グリーン同様、後年は Southern University で指導者として多くの俊英を送り出している。その中にはラスト・アルバム『Marsalis Music Honors Series: Alvin Batiste』を捧げたブランフォード・マルサリスのほか、Donald Harrison, Henry Butler などがいる。80年代の Indian Navigation からの2作は、アヴァンギャルド・ジャズの闘士のイメージが強かったが、NO 人脈のうち、ウイントン・マルサリスの作品にも参加するなど後年は大物ぶりを示した。



Cannonball Adderley (as,ss) Nat Adderley (cor) Roy McCurdy (ds) Walter Booker (b)
George Duke (p) Airtio Moreira (perc.) :

Rec. "The Troubadour", Los Angeles, CA, 1970

そのバティスタを自己のグループにゲスト・ソリストとして招き、録音されたのが、未CD化作品『The Black Messiah - Recorded Live At The Troubadour』(Capitol 2LP)だ。バティスタのほかに、アーニー・ワッツが呼ばれており、エレクトリック・マイルスにも対抗しようかというキャノンボールの意気込みが伝わってくる。

M6. Episode From The Music Came 2:39

The Quintet feat. Alvin Batiste (cl) w/ Ernie Watts (ts) Mike Deasy (g)

次回も通常通りの進行になります。毎月第一土曜日の午後2時から5時までを予定しています。スケジュールは、茶会記のHPでご確認ください。

茶会記 Riverside Jazz Story Vol.11 20110806

text by George Takiguchi (Studio Groovy) studiogroovymusic@gmail.com